（文責:塩田）

翁長安子さん講話（永岡隊での活動）

平成 31 年（2019 年）2 月 28 日

松川 樋川（注 1：ひーじゃー）にて

【長岡隊への入隊と水汲み、食料運びなどの様子】

この写真は 1950 年代に写したものですが、この場所は写真のこの辺りです。写真のここを皆さん歩いてこられました。ここは海抜 80 メートルくらいの森でした。森の跡が残っている頃の写真です。森の部分が切り取られて、ホテルが建ち、周辺の様子は変わっていますが、この井戸（形状は一般的な井戸ではなく、伏流水が流れ出る樋川）だけは残っています。このガジュマルの樹も戦争を潜り抜けた木です。戦後、根っこだけ残っていたのが芽が出てここまでになりました。この松川井戸は、周辺の生活用水となっていました。

この森の上の方に 永岡隊（注 2）の指揮班と第 2 小隊が入っている壕がありました。60 人くらいいたのではないかと思います。壕の出入り口は 3 か所あって、下側には銃眼が設置され、現在の新都心まで見渡せました。炊事はここのすぐそばの小さな壕でやっていました。私の役割は、看護要員、兼、炊事要員です。家族は北部に疎開していましたが、軍国少女だった私は、親友のお姉さんとともにこの部隊に志願して入りました。他にも二十歳くらいのお姉さんたちがいて、全員で 8 名が一緒に入りました。私は看護訓練を受けていませんでしたし、お姉さんの中には看護婦さんもいました。私のできることは水汲みと炊事のお手伝いでしたから、水汲みを希望しました。水汲みというのは、兵隊さんの水筒をこの布バケツに 10 本くらい入れ、ここで水を汲んで 50、60 メートル上の壕に運びます。

部隊は、最初は識名におりまして、ここには 4 月 16 日か、18 日に来ました。その頃は（攻撃は）それほど激しくはありませんでした。この布バケツは、輜重隊の馬に水を飲ませたり餌をあげるときに使うものです。馬の顔が突っ込めるような形になっています。これは、引っ張っても転がしても音が

しません。金物だと音がしたり、相手の電波に反応して人がいるのがわかりますが、これは大丈夫です。ここで水を汲んで上の壕に運ぶことと、下の方にいる第2小隊に1日2回食料を運ぶことも役割でした。その時はこの中に飯盒を4から5個入れて、敵の飛行機に追われながら運びました。昼間は全くできません。朝の4時半から6時までにこの作業を終わらないとグラマンや偵察機は6時くらいになると飛んできます。（偵察機が）人間を見つけると（その場所をめがけて）艦砲射撃が飛んできます。夕方は6時半から動きます。アメリカさんは6時半になったら動きません。その頃になったら、水汲みや夕ご飯に取り掛かりました。これが出来たのも、4月の中旬から5月の上旬くらいまででした。

一番激しかった戦闘は、5月6日から12日くらいまででした。日本は武器がありません。唯一の武器と言えば瓦屋毛（からやーむい。毛は森の意。第1小隊の壕があった。）にある擲弾筒（注3：てきだんとう）くらいでした。あとは小銃位ですが、あんなものは相手にならないですよね。海から艦砲射撃、空から爆撃、陸には戦車、機銃掃射、野戦砲。日本には武器がないのかなあ、というような戦の様相です。やられっぱなしですが、新都心の辺りでは地下からの攻撃でアメリカ兵も5,000人位亡くなったようです。

敵の目標である司令部がある首里城の中間にここはありますから、間違って弾が沢山落ちてきました。その中をどう生き抜くかと、みんな頑張ったわけです。子どもの私から見た兵隊さんの動きは、夜になったら切り込み隊に行くというものでした。そのおじさんたちは、県庁や学校の指導者などで、兵役の経験がある人でした。家族を疎開させて居残り命令が出ている人が2月末に呼び集められて作られたのが長岡隊でした。その中には、私の女学校の1年、2年の担任の先生もおられました。続きは次の場所でお話しします。

注1：樋川（ひーじゃー）
沖縄では、岩盤の奥の水脈から樋（とひ）を使って水を汲みやすくした井戸を樋川という。

注2：永岡隊
特設警備第223中隊。中隊長永岡敬淳少佐の名から、通称永岡隊と呼ばれる。1944年2月に編成されたが、当初中隊本部に常時配置された人員は4名。那覇市近郊の在郷軍人約240名に待命令状を出し、指揮班と三個小隊からなる。待命令状とは、いつでも招集に応じられるよう待機を命じた令状で、在郷軍人に市民としての仕事を続けさせながら、非常時に軍に称する変則的な部隊。県内各学校の教練教官、官公庁勤務や予備役軍人が多かった。（田村洋三著：「沖縄一中鉄血勤皇隊」より抜粋）

注3:擲弾筒（てきだんとう）
手で投げたり、小銃で発射する近接戦闘用の爆弾を擲弾という。擲弾筒は擲弾を発射する筒。（大辞林より）

首里観音堂（慈眼院）にて

【首里攻防戦のはじまり】

井戸があったガジュマルの所から、バスが通っているあたり一帯を今帰仁森（なきじなむい）といって、琉球王朝時代の「官松嶺（がんしょうれい）」という森でした。今は削り取られて、ホテルと民家があります。その民家の上の所に永岡隊（指揮班と第 2 小隊）の壕がありました。私はそこに 34 日いました。それから左手の下の所に森（瓦屋毛：からやーむい）が見えますね。そこに第 1 小隊が。

私が入った壕は、自然壕ではなくて掘った壕で堅固に作られていました。その壕を中心に、弾の中を水汲みや飯運びをしました。弾の雨の中をよくくぐりぬけたと思います。何度かグラマンの機銃掃射にあいましたが、体が小さいので側溝に隠れたりして逃れました。朝晩、攻撃がない時に運ぶようにしましたが、次第に昼夜ひっきりなしに弾が飛ぶようになりました。

次第に怪我人が増えてきました。4 月 29 日ですが、天皇誕生日に、兵隊さんに最後のご褒美ということだったのでしょうね、恩賜のたばことお酒が配られました。第 2 小隊からそれを取りに来られたときに、女学校の担任の糸数先生に会いました。先生の名前を読んだら、振り返って「どうしてここにいる。ちょっと来い」と言って、私の手を引っ張って隊長殿のところに連れていかれました。当時、隊長のところは恐れ多くて子どもの私がいける場所ではなかった。先生は私をそこに連れて行き、隊長に「僕のクラスの子です。どうぞよろしくお願いします」と言われました。私は初めて隊長殿にお会いしました。隊長の次女の敬子さんと同級だということがわかりました。クラスは別でしたが知っていました。「敬子は熊本だよ」とおっしゃいました。家族は熊本に疎開させているのに、この子は残っていると思われたんでしょうね。それからというのは、何かにつけて「ちょっと安子さん呼んでちょうだい」と言って、顔を見たら「気を付けて行動しなさい」と声をかけてくださるようになりました。子弟愛ですか、忙しい中隊長に引き合わせてくださった先生の思い

というものを感じました。もう一人、県の課長をされていた渡嘉敷のおじさんが糸数先生と一緒でした。おじさんは、十十空襲で被災して我が家で暮らしていましたが、2 月に赤紙が来て入隊しました。その渡嘉敷のおじさんと再会してびっくりしました。おじさんは「お父さんが山原（やんばる）からあなたを迎えに自宅に戻っている」と教えてくれました。

【入隊の経緯】

私の家族は、県の命令で 2 月 27 日に疎開しました。私はどうしても家を離れたくなかったので反対して残りました。農園があって動物がいたので、誰が世話をするのかということがありました。また、長男、次男も陸軍と特攻隊で出征していましたので、自分もお国のために何か役に立ちたいと思っていました。女学校では 3 年生から看護要員になりますが、2 年生はなれなかった。私もどうにかして入りたかったので、私が留守番するからと言って残りました。父は、この子は言い出したら聞かないとあきらめて「2 週間たったら迎えに来るから、それまでに覚悟を決めておけ」と言って疎開しました。しかし、待っていましたが父は来ませんでした。そのうち、3 月 23 日に南部の湊川という所にアメリカ軍の艦砲射撃が始まりました。皆、南部から戦争がはじまると思いました。ひめゆりの学徒隊も 3 月 23 日に寄宿舎から南風原の陸軍病院に移動しました。向かいの金城家の貞子さん、信子姉さんは幼なじみで、戦争が始まったら一緒に行動しようねと言っていました。その時は、まさか 100 日も戦争が続くとは思いませんでした。そういう約束をしていたのですが、貞子さんが看護要員として呼び出され、ひめゆり学徒隊にいきました。それで私は一人になってしまいました。そういう時に、永岡隊に看護要員と炊事要員がいないということを金城さんのお父さんが聞かれて、行かないかと声をかけてくれました。信子姉さんや近くの郵便局員などの二十前後のお姉さんたちに混ざって、私も希望して永岡隊に入りました。

15 歳の小娘が何をするのかと、みんな腑に落ちなかったでしょうが、農園があったので働くことは慣れていました。でも、小さかったのでお姉さんたちの足手まといになったと思いますが、水汲みと飯運びなら大丈夫ですと、希望してやりました。永岡隊は、今帰仁森（なきじなむい）というここに来る前の 2 週間は識名という所にいましたが、その時はあまり激しい爆撃もなかったので、（その時に）看護指導を受けました。包帯の巻き方、三角巾の使い方、応急処置の仕方などを衛生兵から習いました。いきなりそういう指導を受けても身につくわけはないので、炊事の方を受け持ったわけです。

【激化する首里攻防戦】

擲弾筒の（第 1 小隊）陣地で 5 月上旬からは死傷者がどんどん出ましたが、治療する場所がないんです。陸軍病院は首里城の裏の壕にありましたが、首里城めがけて弾を打ち込んできますから、患者を運ぶ途中でやられてしまいます。山部隊という所から患者を運ん

だお姉さんたちが戻る時、焼野原になった首里の町で隠れる場所がなくて迷っていたら、日本兵にスパイではないかと疑われて永岡隊の所に連れてこられました。焼野原になったあんなところを女が二人でうろうろしているということは、スパイに違いないと疑われました。石部隊の渡辺という少佐に散々悪口を言われて、このお姉さんは自分が持っている手りゅう弾をぶつけてやろうという気持ちになって、方言で「殺してやろう」ともう一人のお姉さんに言ったところ、永岡隊長が方言を使ったけどどこの出身かと聞かれました。そして「いきさつを方言でもいいから話してごらん」と言いました。そうすると、その人は隊長の中学生時代の同級生の子どもだった。同級生の弟さんも小学校の校長をしておられた。永岡隊長と縁のある人だった。「お前らはスパイか慰安婦だ」と疑われていたのですが、その証言でスパイ嫌疑が晴れ、そのお姉さんたちは永岡隊に合流することになりました。看護のベテランだったので大変助かりました。

その後、新都心も見込みがないということで、永岡隊長は、最後は安国寺だということで夜中にここを脱出して5月18日に安国寺の境内に行きました。お寺は既に焼けています。今の首里高等学校、当時の一中もコンクリートの焼け跡だけが残っています。首里の町も焼野原になっていました。安国寺の壕は、それまで一中健児隊が使っていましたが南部に撤退して、永岡隊の生き残りがそこに入ったわけです。ちょうどいま私たちが立っているところには第3小隊の壕がありましたが、直撃弾が当たり20数名のうち生き残ったのは5、6名でした。ここも永岡隊の一部の兵隊さんが陣取っていたところです。

この辺りが首里城を攻める日米の最後の戦場だったと思います。南を除く3方から首里城めがけて撃ち込まれた弾が20万発と言われています。本当にどこから打ち込まれるかわからないほど弾の雨でした。写真もありますが、首里の町の弾痕をみると、こんなにも弾が落ちたのかというほどでした。戦後、工事をするたびに弾が何発出たということが続いています。私は、戦争の翌年、首里高校の2期生です。首里の残骸の中で生活しました。仮の寄宿舎に100名の女生徒がいましたが、まわりは不発弾がごろごろです。首里城の周りには遺骨もありました。飯炊きをするにも薪がありませんから、瓦礫の山を歩いて燃やせるようなものを拾い集めて、炊事のおばさんに提供していました。首里一帯に打ち込まれたアメリカの爆弾というのは数えられないほどでした。

安国寺の永岡隊慰霊碑にて

【安国寺の壕へ移動】

ここに刻まれている永岡隊の英霊の皆様は、十十空襲のあとに部隊が編成されて集まった皆様です。普通の軍隊とは違って、全員が顔見知りでもないわけです。いつでも集まれるようにしておきなさいという令状、赤紙は既にもらっていた、特設警備招集隊です。沖

縄をリードする立派な方々がこの部隊に集まっていました。ここに刻まれてない方もいらっしゃいます。隊長さんは一中、今の首里高校の教練の先生でもいらっしゃったし、安国寺の住職でもあられたわけです。第一小隊長は、戦後初代の那覇市長になられた当間重民（とうまじゅうみん）さん、当時貴族院議員でした。第2小隊長は城間正三郎（しろませいざぶろう）さん、この方は商業学校の教練の先生。それから、第3小隊は喜納信吉（きなしんきち）さんとおっしゃる、二中、今の那覇高校の教練の先生。水産学校、商業学校、沖縄の中学校の教練の先生皆ここに集まっておられます。生き残った当間重民さんは、倒れているとこをまだ脈があるとアメリカ軍に助けられた。あとはほとんど戦死なさいました。

これは3番目の慰霊碑ですが、最初の慰霊碑に刻銘された方、2番目の慰霊碑に刻銘された方と増えましたが、それでもまだ不明の方がいらっしゃいます。戦場というのは、一人一人のお名前も確認できない。それがまだ続いています。でもきっと、皆様が呼び寄せて、天国ではご一緒しているのではないかと思いながらいつも拝んでいます。

ここの壕に今帰仁森（なきじなむい）から移動してきたのが、5月18日の夜でした。一中健児隊の5年生が、永岡隊の方と一緒になって壕の裏側の壁をぶち抜いて通り抜けができるようになっていました。ここは大変広い壕で、戦前は沖縄の特産品であるパナマ帽を編む場所でした。パナマ帽は真っ白い帽子ですから、薪を使う普通の家では煤が付くので良くないのですが、壕の中は湿度も良くて煤で汚れないので作られていました。安国寺には当時唯一の幼稚園もありました。だから、当時の幼稚園を出た人たちも、壕の中に入ってこうだったよというような思い出を語ってくれます。それくらい広い壕でした。そこに18日の夜、裏道を通って安国寺のこの壕に入りました。一中勤皇隊との入れ替わりでした。永岡隊の第1小隊、第2小隊などの切り込み隊に行って生き残った人たちも、ここが最後の場所ということで集まりました。

【安国寺の壕の様子】

ここでの生活は、今帰仁森（なきじなむい）とも違って首里城のおひざ元ですので、それこそ弾の雨でした。水汲みも飯炊きも大変でした。ここに来てからは飯炊きをする方々はおられません。指揮班の女性と兵隊さん達で小さなかまどを何とかして作って、煙が外に出ないように注意しながら、小さな鍋でご飯を炊いておにぎりを作っていました。足りないときは、乾麺包（かんめんぽう）、乾パンです。海軍や航空兵の乾パンは大きくて 5 センチ、10 センチくらいですが、陸軍のは小さい。縦横 3 センチくらいですか。食料にも差がありましたが、それを 5、6 個と水を飲むだけが命の糧でした。晩になったらどうにかご飯を炊いて、1 日 1 食は食べ物らしいものを食べて、あとは乾パンと水という状況でした。安国寺の井戸に直撃弾が落ちて使えなくなって、2 軒ほど離れた家に、朝早く行って、遅くとも 6 時までに水を汲まないといけなかった。水がないと生きていけませんので、その時は私だけでなく総動員で水汲みをしました。

ここの壕は広いのですが、他の部隊の応援に行ってけがをして帰ってくる兵隊さんが多くいまいた。でも、薬もない、軍医もいない。治療ができないのです。衛生兵が一人いましたが、治療どころではない。けがをした場合には水を飲ますなと言われていましたが、何もできないので最後には飲ませていました。やはり水を飲ますと、傷の大きい人たちの出血がひどくなります。爆撃もどんどん激しくなるので外に出られない。27 日、何名か判りませんが第 3 小隊が儀保（ぎぼ）、平良（たいら）の戦闘の応援に行って、喜納小隊長など 8 名がすぐそばのお墓の所までたどり着いたにもかかわらず、爆弾でやられて、小隊長がやられたと大きな声を張り上げて、取り乱して、最終的に戻ってきたのは 4 名でした。当番兵の石原さんがご苦労、ご苦労と言って、水と残っていた食べ物を上げて、中で休ませました。

【最後衛命令と安国寺壕の最後】

32 軍が南部撤退を始めた日が 27 日です。その晩、自然の雨と弾の雨が降る中を、糸数先生が 32 軍の命令を伝えに来ました。永岡隊は郷土部隊だから最後まで残れという命令が出ました。子どもながらに「ひどいなあ」と思いました。32 軍が撤退した後は、首里を守る部隊は、私が知る限り壕の中にいる 30 名くらいしかいません。私の担任の糸数先生は、私を見つけると頭をなでて何もおっしゃいませんでした。胸が詰まって何も言えなかったと思います。頭と肩をたたいて、雨の中を出ていかれました。「先生どこに行かれるの」と聞いたら、「うん」と何も言わずに行かれました。それが先生との今生の別れでした。この崖下の所で、出ていかれる先生を見送りました。

その翌日、いつものように朝早く水汲みに行きました。2 回目の水汲みの時、歩哨兵が「とんぼだぞー」叫びました。いつもは 6 時頃で、偵察機はこんなに早くは来ません。早いなと思いながら急いで壕に駆け込んだら、ゴーという音がしました。いつもとは違う音です。歩哨兵は戦車が来たと言って壕に飛び込んできました。キャタピラーの音が止まっ

たと思ったら、戦車砲が壕の中に打ち込まれました。昨夜くたくたになって帰ってきた第3小隊の生き残りのおじさんたちを直撃しました。戦車砲のあとは火炎放射器で入口の土嚢などが燃え始め、中まで火が移ってきました。壕の中は煙が充満して、息苦しくなり、追い打ちをかけるように黄燐弾が投げ込まれました。息ができないので絶体絶命です。幸い私たちは、十十空襲で裁判所が焼けた時に残った書棚、金庫と言っていましたがその裏にいました。そこには、お寺の本尊などを置いていました。そのお陰で、戦車砲や黄燐弾の直撃には合いませんでした。右にいた兵隊さんは直撃を受けて、見る見るうちに目の前で燃えていくんです。暴れながら焼かれていくんです。私たちも息苦しい状態です。書棚の中には防毒面があって、石原兵長の防毒面着手という声がしたものですから、近くにいた人がそれを配って、それを被った人たちは窒息死しないで済んだんです。壕の上の方で、ギリギリという音が始まりました。そうしたら、隊長殿が「馬乗りされたな」とおっしゃった。その音が消えた後に、ババーンという大きな音で壕が爆破されました。それっきりわかりません。

【安国寺壕の脱出】

どれくらい時間がたったのか判りませんが、奥の方から隊長殿、隊長殿という声が聞こえました。渡嘉敷のおじさんでした。「渡嘉敷はもうだめです、お世話になりました。お先に」と言ったものですから、隊長殿は「ご苦労だった。先に行っておけ。わしもすぐに行くからな」と言いました。渡嘉敷のおじさんが「安子さんもいるか」と言いましたので、私は煙で目が見えなかったので「おじさんどこにいるの」と言って手を出して探り当てるとそのまま息を引き取りました。そのようにして生き残ったのは、隊長、当番兵、衛生兵、女性6名でした。あとは物音がしません。しばらくじっとしていました。

当番兵の石原さんが壕の外を見て日が暮れているのを確認して「これから壕を脱出します」とおっしゃるんです。隊長は、「自分はここが最後だから脱出はしない」と言われます。隊長と石原さんの言い争いが続きました。32軍が永岡隊も転進先を探してよいという許可が22日に出て、先発隊が南部の具志頭（ぐしちゃん）に壕を確保しに行っています。石原さんは「先発隊が待っているから、ここで死ぬわけにはいかない。隊長、脱出しましょう」と。9時過ぎだったと思います。石原兵長が先頭になって、隊長殿がその後になって。出るときになると、隊長殿が「安子ここに来なさい。私のベルトのここをつかみなさい」と自分のベルトをつかませました。親心ですよね。隊長殿の剣のベルトがあります。そこをつかまえて続いて出ました。

照明弾の明かりの中で見た景色は、本当に恐ろしい情景で。首が壁にポンとくっついているし、中身の破裂した人、手足が周りに散っているし、地面は死の海です。あの照明弾の明かりで見たあの情景、ここをどのようにして私たちは歩けばいいのか。子どもながらに、私、足をどこに置けばいいのかと思いながら、隊長に引っ張られて3歩か4歩歩いたところに、黒い岩と思ってそこに足を置いたら死体でした。雨に濡れて、血の海で、すっ

てんと転んで崖から転げ落ちました。そこで皆さんとはお別れ。同時に、上で待機しているアメリカ兵が自動小銃をバラバラと乱射しました。その弾は、私のリュックを貫通して左の背中から脇に抜けたようです。あとで背負っていたリュックが亡くなっていることで分かりました。

【一人ぼっちの逃避】

そこで何時間いたのか判りませんが、死体の中にいたようです。目が覚めたら、死体の中に自分が倒れている。動いたら動ける。死体の中は嫌だと這い出してみたら、ちょうどここの裏の通りでした。下からアメリカ兵が４名、掃討作戦をしながら歩いてくるのが見えます。照明弾でそれくらい明るいんです。アメリカ兵に殺されると思って横を見たら、日本のトラックの残骸があってその周りには日本兵の死体が並んでいたので、そこに隠れて死んだふりをしていました。日本の軍隊は、中国でも死んだ人を刺して通ったと聞かされたこともありましたので、刺されるのでは思っていましたが、アメリカ兵はそのまま横を通り過ぎていきました。それから這って下の道まで下りました。のどが渇いてしょうがない。一日中、飲まず食わずでした。傷の痛みより、のどの渇きの方がひどかったです。坂道を降りたところに湧き水の出るところがあったことを思い出して、そこまで這って行きました。そこには死体が２つ浮いているもんですから、それをよけて顔を突っ込んで水を飲みました。

今度は背中が裂けるように痛みを感じ始めました。背中を触ると、手にべっとり血が付きました。私は背中をやられているということがわかりました。水を飲んだら出血がひどくなるということを思い出して、出血を止めるにはどうすればよいかと考えました。モンペのひもに応急手当て用の三角巾があったので、応急手当のことを思い出して自分で止血をしました。左のここのところをこのようにして、しっかりと縛り付けました。

それからずっと匍匐前進。膝と手で金城町の石畳の所まで這い出て、ゴロゴロ日本兵の死体がころがっている間を通り抜けて、識名に抜ける坂の所まで来たら橋が無くなっています。撤退するときに橋を壊していくんですね。私は子どもですから、そこで大きな声で「お父さん、お母さん、助けに来て。私ここにいるけど、ここで死にたくない。助けに来て」と大きな声で泣きました。戦場は死体だけで誰もいません。泣けるだけ泣きました。そしたら黄燐弾が降って来たんです。空中から銀色のものが降ってくるんですよ。それにあたると火傷します。どんなふうに座っていたのか判りませんが、ちょっとした岩があってその影に隠れたら右側のここにギラギラのそれが当たりました。早く取り除けば火傷しない。カッターを脱いで捨てたら、長く跡が残っていましたが軽い火傷で済みました。ここで死にたくない、どうしようと橋を覗いたら、欄干の所に丸太のようなものが一つ架かっている。近くにあった棒きれのようなものでたたいたら木の音がした。周辺は松林だったので、私より前の人が倒れた松を架けたんじゃないかと思います。欄干におりて、松を這いながら向こう岸に渡りました。

そこから死体の様子が変わるんです。民間の人の死体も混ざっています。金城町の石畳の死体はみんな軍人です。照明弾の明かりで見えるんです。川を渡ってくると避難民の死体があります。その間を抜けて識名園の所まで行きましたら、溝の中から女学生さんという声がするものですから、何故女学生とわかるのかなと思いました。多分、勤皇隊か、誰かで、首里城にいた人がけがしてそこに休んでいたんじゃないかと思いましたが、私はけがして助けることはできません。「ごめんなさい、あとからくる人がいるかもしれません」ということで、そのけが人を見捨てて真和志の体育館のある所まで墓の間を通り抜けて行きました。いきなりきび畑の中から日本兵二人が飛び出してきてこの小さな女の子を捕まえたんです。

「お前スパイだな」

「私はスパイじゃありません」

「どこから来たか」

「首里から来ました」

「首里のどこか」

「安国寺からです」

「名前を名乗れ」

名前を名乗りました。

「永岡隊という部隊にいたけど、みんなと離れてしましました」

「隊長名を言え」

初めてそこで、隊長殿お会いした時に先生が「隊長のお名前は永岡敬淳だよ。覚えておけよ」と言ったことが役に立ちました。フルネームで答えたんです。そしたら、「隊長以下７名が４時間ほど前にここを通った。お前もホクバ川を泳いで渡れ」と。私は「けがをしているので川には入れません。一日橋を渡ります」。「一日橋に行ったらやられるぞ」と、その兵隊が私に道を教えてくれましたが、私は隊長殿の後を追わずに、南風原、東風平を通って目的地に向かいました。

【おわりに】

皆さんにはわかりにくいところもあるかもしれませんが、やはり戦争はあってはいけないんだ、ということです。人間が人間でなくなる。お互いに敵も味方も、個人同士は憎みあう理由は何もないです。国の、政治の動きでそのように操られた教育で私も軍国少女になって、親兄弟よりもお国のために役立つのが良い国民だと植え付けられた教育の恐ろしさを、戦後は反省しました。私たち体験者が生き残っている間は話もできますが、そのあと、平和のありがたさ、命の大切さを皆さんが語り継いでくだされば ありがたいと思います。よろしくお願いします。

（文責:塩田）

中山きくさん講話（白梅学徒隊について）
平成 31 年（2019 年）3 月 1 日

【「白梅の塔」の歴史】

本日、「白梅の塔」にお参りいただいて本当にありがとうございます。私は白梅学徒の一人でした。昭和 20 年に戦争が終わりましたが、私の仲間たち 22 名が亡くなったということは、10 年ほどしてわかりました。当時はどこにだれが住んでいるかわからない。担任だった金城宏吉先生が、自分は生き残って教え子をたくさん亡くした、申し訳ない、一日でも早く慰霊をしたいと奔走されました。それでも、10 年間誰がどこで亡くなったか判りませんでした。1946 年に、小さな白梅の塔を先生がこの近くにお一人で建てられました。この辺に住んでいる同窓生 2、3 人と先生が中心になられて慰霊祭を催してくださいました。私は那覇におりまして、全く知りませんでした。

ここの場所がわかったのは 6 年後でした。昭和 26 年、ここは国吉（くによし）という地ですが、この辺に戦争中は白梅学徒がいたということを耳にして、調べてみるとここで多くの白梅学徒が亡くなったということがわかりました。それで、金城宏吉先生が村の人たちと相談され、最初はどうもということだったそうですが、当時村長をされていた方が戦争のために亡くなった乙女の慰霊碑だから建てさせようじゃないかと骨を折ってくださいまして、昭和 26 年に今の塔と同じ形の 2 代目の慰霊碑ができました。

今の塔は 3 代目です。何故、同じような形で 3 代目を建てたかと言いますと、2 代目はセメント製でした。戦後 6 年目というと、やはり私たちの暮らしもまだまだきつい時代でした。卒業生の御主人がそういうお仕事をしておられたということあり、比較的安価なセ

メントで作ってくれました。

3代目の慰霊碑は平成4年です。供物台、説明版、慰霊塔などを一度に建てることはできませんでした。毎年、毎年、ご遺族と同窓生、そして応援してくださる方々の浄財をいただいて少しずつ整備してきました。国や、県からは全くございません。ここの参道だって、いくつもの線が入っていますけど、今年はここまでというように整備してきました。参道は、はじめは板でした。それが少しずつセメントになりました。平成4年にはこれらが全部大理石でできました。同窓生をはじめいろいろな方のご協力をいただいてできました。亡くなったお友達の供養になったんじゃないかと思っています。

ここには先生方が22柱、上の段の右側です。それから上段の左側、いわゆる白梅学徒と言われる私の仲間たち22名、下の方は当時の在学生とか卒業生など戦争で犠牲になった方々です。149柱をおまつりしています。いまだに実数は分かりません、同窓会の調査とご遺族からの報告によって現在は149柱ですが、沖縄戦の戦没者の実数はとうていわかるものではありません。作った時は147柱でした。あとから2柱みつかりましたが、ここ10年くらいは申し出がありません。

亡くなった22名の学徒隊のうち一番多かった10名がここで亡くなったのでここに慰霊碑を建てさせていただきました。ここから少し離れたところにアメリカ軍の総司令官バックナー中将の慰霊碑がありますが、バックナー中将が亡くなった後、アメリカ軍の報復攻撃で多くの壕が火炎放射器でやられました。この近くには5つの慰霊碑がありますが、それぞれとても悲惨な状況だったそうです。

病院の解散命令が出た後、16名の学徒がここに立ち寄ったことは分かっています。その中から自分の意思で、家族と行動を共にしたり、看護婦さんと共にこの壕を出た人もいます。残った12、3名が火炎放射を受けるわけですが、昭和26年にこの壕がわかった時に、看護婦や兵隊さんなど17柱の遺骨が見つかりました。ところが、ご遺族もお呼びしましたが誰の遺骨かわかりません。小さなものは女学生の遺骨だろうなということで、この慰霊碑の納骨堂に納めました。平成4年に3代目の慰霊碑を作った時に、県に勧められて火葬しました。現在はDNA鑑定ができる時代になりましたが、そのままにしておいたな

らば鑑定できたかもしれませんが、当時は良かれと思ってやったことでした。彼女たちの遺灰、火葬した遺灰はこの納骨堂にまつってあります。

【白梅学徒隊の軌跡】

皆さんにプリントを配っています。右下の表を見てください。沖縄戦の女子学徒隊、ひめゆり、白梅というように、学徒隊があってそれぞれ最寄りの場所に慰霊碑があることをわかっていただきたいと思います。私たちは、昭和 19 年の十十空襲で校舎を失っていました。そこで①の国場（こくば）駅という場所に集まりまして、軍歌をうたいながら、軍歌というのは敵をやっつけるぞ、勝ち抜くぞという歌詞の歌ですが、東風平（こちんだ）国民学校に開設されていた山部隊の衛生看護教育隊に入隊しました。当時の国民学校というのは、今の小学校です。昭和 16 年から 20 年までありました。子どものことを当時は小国民と言いました。小国民はお国のために働く立派な人材と言われていました。その頃のお国のためというのは戦争でした。小学校 3 年の頃から、隣の中国と戦争がはじまり、毎日毎日戦争の話を聞かされました。日本が勝った、勝ったという学校時代を過ごしました。女学校に入った昭和 16 年 12 月 8 日に、真珠湾攻撃がありました。中国との戦争が続いているのに、アメリカとの戦争も始まって、私たちの青春は戦争一色でした。しかし、負けるなんてみじんも思わない。あの頃は、進んでお国のためにという時代でしたから、私たちも看護教育を受けました。前の年には十十空襲もありましたから家のものからは引き止められました。小さな時からの軍国主義教育を受けていたので、大丈夫と言って振り切って看護教育を受けることにしました。

看護教育は 1 か月くらいの予定だったそうですけど、艦砲射撃などが激しくなりわずか 18 日で打ち切られました。そして積徳学徒隊の人と一緒に、③の山第一野戦病院に配置されました。その後、④から⑥の新城（あらぐすく）分院、東風平（こちんだ）分院などに分かれていきました。この 4 か所に配置され、兵隊さんの看護に務めました。しかし、薬品も包帯もないので手当てすることもできませんでした。そしてとうとう、6 月 4 日に野戦病院の解散命令を受けて、鉄の暴風雨と言われる中をいろいろな壕を逃げ回って奇跡的に生き延びました。

【戦争体験の話すきっかけ】

私は生かされたと思っています。戦争の惨禍を伝えなさいと、でも私は 50 年間白梅学徒隊だったことを話せませんでした。結婚し、子どもができ、人生の節目、節目で、友達の面影が浮かびましたが、どうしても話すことができませんでした。戦争中のことは話しましたが、白梅学徒だったことは話せませんでした。どうして話すようになったかというと、皆さんは広島県から来られましたが、沖縄は戦後 27 年間日本人じゃなかった。沖縄が復帰した年に、国家公務員だった夫の転勤で私も仕事を辞めて広島に行きました。それが現在の私に結び付いています。私にとって広島は大切な場所です。そこで原爆資料館は

もちろんですけど、被爆者の方とも交流して、30年くらいたってから沖縄に戻りました。沖縄戦のことも原爆と同じように、人間は過去を知らないと同じ過ちを犯すかもしれない、それが心に響いて仲間たちに記録を残そうと呼びかけましたが、誰も首を縦に振ってくれません。私は広島で体験したいろいろな思い出が重なって、私が音頭を取ってみんなで奮闘してやっと50年目に「平和の道しるべ」という本を出しました。そして私はみんなに宣伝しました、今日から白梅のことを伝えると、そして今日に至っています。私は戦争の辛さを伝えるために生かされたと思っていますので、これからも話していこうと思っています。

【戦後の沖縄】

2枚目裏を見てください。最初の線で囲んだところを読んでください。この文章に私の思いは全部含まれています。沖縄は戦後27年日本人として扱われなかったのですが、復帰から47年経っても安全、安心な生活をすることが出来ない。先日、県民投票がありましたが、多く基地があるのにまた新しい基地を沖縄に作ろうとしている。物事には限度があると思います。必ずしも沖縄でなくても良いと思うのに。43万4千票、投票者の72%の人が反対しているのに、沖縄の人に説明をしながらこれからも進めていくということで、全く沖縄の人の気持ちを受け止めてくれていない。私は、戦争体験を話すことも大事だけど、現在の沖縄の様子を多くの方々に知ってもらいたいと思っています。

今日は持参していませんが、7年くらい前に不発弾の調査をしました。調査というのは、不発弾に関する新聞記事を1年間集めました。その年は閏年でしたから366で割りましたら、4.3くらい。つまり4日に1回不発弾の記事が載っているということです。不発弾が見つかった、処理をしたという記事も入れての数です。今は工事などをする前に、不発弾がないかの調査をしますが、今でも74年前の不発弾が出てきます。戦争の傷が今でも埋まっているということです。

【体験と慰霊の継承】

私たちもこういう歳になりました。伝えるために生かされていますから、できる限りはやりますが、あと少しでしょう。戦争体験者がいなくなったら、戦争体験は伝えなくてもいいのか、NOです。戦争体験を伝え、亡くなった方の供養と平和を願う慰霊祭は絶対に続けなくてはいけない。白梅同窓会では、それをどのようにして続けていくのか、協力してくださる方々と一緒になってその方法を考えています。体験を伝えること、平和を願う慰霊祭を続けること、この両方はどちらが欠けてもいけません。

私は、皆さんはこのメンバーに入ってくださっていると思っています。毎年、沖縄に来て、歩いてくださっています。岡本ゼミの皆さんが来られた第1回目、皆さんが歩いてくださっている姿を車の中で見て涙があふれました。その時は、ヌヌマチガマという所で助かる見込みのない500人の兵隊が青酸カリで殺された場所があるという話をしたら、先輩

方はそこまで行きたいと言われ、予定外でしたがそこまで行って中に入って現場を見てくれました。岡本先生に、他の学徒隊のことも訪ねてくださいとお願いしましたら、皆さんが頑張っている間は私たちも沖縄を歩きますよとおっしゃってくださいました。宮古八重山にも代表の方が行ってくれました。そういうことをずっとやってくださっているのは皆さんだけです。心から感謝しております。男子学徒の所も歩いてくださいました。これからも沖縄戦のことを多くの方に伝えてください。戦争の悲惨さ、その悲しさを伝えてください。ありがとうございました。

（文責:塩田）

翁長安子さん講話（遺骨収集活動）

平成 31 年（2019 年）3 月 1 日

【いのうえ　ちず　さんによる「魂魄の塔」の説明】

ここは沖縄で最初に出来た慰霊塔の 3 つのうちの一つ「魂魄の塔」です。民間の人達は、投降して捕虜に取られたとよく言いますが、アメリカ兵に捕まると民間人収容所に収容され真和志村の方々はこの辺りに来られました。その時の地図がこれです。皆さんが歩いてきた「ひめゆりの塔」はこの辺です。そこから米須の三差路、「瑞泉の塔」があるあたりを曲がって畑の中を歩いてきましたよね。その道の両サイドにテント村がありました。そこに真和志村の方々が収容されました。そこでのお話しを翁長安子さんにお聞きします。

【首里から南部への避難】

お疲れでないですか。昨日の話の続きになります。私は、首里の戦場から一人で南風原村、東風平を通って、東風平国民学校の前で倒れているところを近所のおじさんに見つけられて、そこで助けてもらいました。けがをしている体を見て、一般の人は治療してもらえないけどあなたは従軍していたから治療してもらえるということで、ヤエスの病院壕に連れて行かれ治療してもらいました。それから目的地の具志頭（ぐしちゃん）の安里（あさと）という所まで一人で行きました。でも長岡隊の先発隊のおじさんたちはそこにはいませんでした。壕が見つからずに糸洲の方に行ったと、地元のおばさんに聞かされてがっかりしました。そのおばさんが、あなたはけがをしているからと、ニンニクと塩をくれました。沖縄では春に収穫したニンニクを軒につるして薬の代わりにしますが、そのニンニクを傷口につけるとウジがわかないと言われました。それを食べ、塩をなめ、お芋を食べさせてもらって、3 か月ぶりに床に一晩に寝かせてもらいました。

翌日、道で糸洲の方角を訊ねていたら、首里からの兵隊さん達が来ました。肩をけがしている兵隊さん、足を怪我している兵隊さんがいて、ウジがわいていました。そのウジを

私はススキの根っこを使って一緒にかき出しました。そして、ニンニクを噛んで傷口につけると、肩のウジはポロポロ落ちましたが、足のかかとのウジはますます大きくなるばかりで一晩で2倍くらいの太さ、小指位の太さになりました。体の栄養分をこのウジが吸い取ったような感じで、兵隊さんはぐったりしていました。それでも、糸洲に先発隊がいるということを聞いたので、3名は勇気を出して、安里の製糖工場の跡でしたが、翌日そこを出発しました。

左に行くと32軍が移動してきている摩文仁丘で集中攻撃を受けるから、真壁を通って行きなさいと教えられました。15歳の小娘が二人のおじさんを案内して、真壁村を通り、牛の歩みで遅いので一晩野宿しました。翌日畑で芋ほりをしているおじいさんに道を聞きました。その周りには浦添や宜野湾から来た避難民が朝早くから一生懸命食べ物を探していました。その方たちの話を聞くと、南部に行けば大丈夫と言われて来たけど、入れる壕もない、食べ物もない、どうしていいかわからないから、みんな木の下に座ったり、石垣にもたれたりしているとのことでした。何百人という人が右往左往しているという状況でした。そこをかき分けるようにして、やっと糸洲にたどり着きました。首里から生存者が来たと大騒ぎになりました。私も意識が朦朧として、翌日の昼、目が覚めたら足を怪我したおじさんが亡くなったことを聞きがっかりしました。でも、頑張って仲間の所まで来て死ねたから良かったんじゃないかと皆さん言ってくれました。

弾の雨のような首里からすると、戦場とは思えない静かな1週間だったので目的地までたどり着けたように思います。それから2、3日たって、隊長一行が轟の壕にいるということを聞きました。それで無性に会いたくなって、糸洲の壕から轟の壕まで会いに行きました。「よくぞ首里から生き延びてきてくれた」と言って、隊長は私の頭をなでてくださいました。本当に、父親にでも巡り合ったような気持ちでした。それからそこを出て糸洲の壕に行き、集まることができたのは40名くらいでした。そうすると、歩けるものは宮里、糸満などの戦線に出陣せよという命令が来ました。首里から生き延びてきた永岡隊でしたが、糸満の戦場に向かい、帰らぬ人となりました。南部に来てまで永岡隊はそのようなひどい目にあいました。

その後、私たちは糸洲の壕にとどまることが出来なくなりました。キビ畑でキビを取っている人、芋を掘っている人も、戦車、火炎放射器で焼かれていきました。避難民も、どこに逃げればよいのか、道なのか、畑なのか、人の群れなのかわからないほど、昼間は身動きできません、夕方になると避難民の人の波で一杯になりました。避難民の様子も様々です。おぶっている子が生きているのか、死んでいるのか、わからないような状態です。お爺さんが、もっこの一方には死んだ子供を、もう一方には鍋釜を乗せて移動している。道端には、死んだお母さんのおっぱいを吸う子ども。もう、表現のしようがありません。木の枝には、爆弾で吹き飛ばされた死体がぶら下がっている。あの情景は言葉では表現できなくて、本当に人間の行動の醜さというんですか、弾が人間を皆殺しにするというような情景は表現できません。

そのようにして6月22日、ここから1キロくらいの地点、山城の壕に生き延びた永岡隊は入りました。もうそこでは、戦闘どころではなく、弾が雨あられのように降ってきて一歩も外に出られません。水も、食料もない、壕の中に潜むだけでした。4日間その壕の中に潜んでいる間、命を長らえたのは鍾乳洞から落ちるしずくを、元住民が壕に残していった湯飲みなどに数時間かけてため、みんなで分けて飲んでいました。何も食べないと脳が死ぬというので、衛生兵が岩を削ってくれました。口に入れると塩分があるので唾液が出ます、それと鍾乳洞から落ちる水をなめて過ごしました。

【アメリカ軍への投降】

4日目の朝、アメリカ軍の拡声器から「住民の皆さん、今日は弾を打ちません。手を上げて出てきてください。無抵抗のものは殺しません。出てきてください」という放送が流れてきました。その時に、永岡隊長が、「今日は最後の掃討戦があるので女子供は足手まといなるので壕から出せ。投降させなさいという指令が来ている」ということをおっしゃいました。それでも私たちは、捕虜になるといろんな目にあわされるということ聞いていましたので投降する気はなかったんです。けれども隊長殿がおっしゃったことは、「君たちは若い、生きてくれ。生きてこんな戦があったことを語ってくれ」、こうおっしゃいました。それでも返事はしませんでした。そしたら隊長は懐の中から数珠を、もともと安国寺の住職ですから祖先伝来の数珠をずっと持っておられて、その数珠を出して私の首にかけて、「安子さんご苦労さん。生きてくれ、生きていればだれかに出会うだろう。これを預かってくれ」と言われ、首にかけてくれました。生きてこの数珠を届けなさいということだなと思い、初めて「はい」と返事をしました。持っている手榴弾は置きなさい。手ぶらで出てくれとおっしゃいました。18歳になる具志堅さんという方が、僕が先に出ますといって、歩けない私をおぶって壕を出ました。井戸のような壕ですので、3段階になっていました。その2段目まで上がった時に、2世のアメリカ兵が大丈夫だと言って私を引っ張り上げました。それから中にいる皆さんが出てきて、8名一緒に投降しました。

外に出ると同時に、ものすごい死臭、銀蠅で、息もできないような状態です。死体は山のようにありました。2世の兵士、他のアメリカ兵が3名ほどいましたが、一緒になって連れて行かれ、先に捕虜になった人たちの群れの中に入れられました。そこで身体検査をされて、真っ先に取り上げられたのが数珠でした。私は、しがみついたんですが、あとから来た姉さんたちが「安ちゃん手を離して、みんな殺されるよ」と言ったものですから手を離しました。「これほど大事な数珠を取り上げられてたまるものか」と思いましたが、みんなの命には代えられませんでしたから手を離しました。その数珠はそれっきり戻ってきません。アメリカの戦勝品として持っていかれたでしょう。

【石川の収容所生活】

それから豊見城のザハという所に収容所があって、2晩そこに寝かされて、夕方になっ

たら次々にトラックに乗せられてどこかに連れて行くんです。どこかは分かりません。一緒だった仲間がバラバラになって、一人ぼっちになりました。トラックに乗せられて北の方に行きます。10 数台のトラックのおしまいから 2 番目くらいに乗せられて、あとで判ったのですが、着いたのは中部の石川という所でした。そこで、孤児として 7 か月の生活をしました。7 か月一人ぼっちで生活するのは並大抵のことではありません。着の身着のまま、所持品ゼロ、100 人位入る割り当てられたテントの中には、子どもと、年寄りと、けが人だけしか入れません。若い者は野宿です。紙袋が 3 枚配られ、2 枚は敷いて、一枚は被る、石川の町は砂地でそれができたと思います。6 月の真夏ですので寒さはないです。

1 日おきに 6 キロ離れたとこで芋ほり作業をして、食べるものもろくにない生活をしたせいか、2 か月くらいたった時に高熱を出してアメリカ軍の病院に運ばれ、4、5 日居たようです。意識が戻った時には、髪は切り取られ、着ているものもはぎ取られ着替えさせられていました。その後収容所に返されましたが、病人ということで芋ほり作業は免除されました。

石川という所は早くから収容所ができたところで、そこでは学校が始まっていました。南部では戦争をし、北部では収容所で学校が始まっているんです。石川高校が始まるので、戦前の小学校、中学校の生徒は集まれというおふれが出ました。私もそこに行って、1 か月通っている時に、真和志村民集まれという知らせが来ました。嬉しくてたまりませんでした。親兄弟のことは少し前に分かっていたのですが、会うこともできずにいました。

【米須の収容所への移動】

沖縄全島に 11 の住民収容所がありました。その収容所から各市町村に帰ることが許されるところと、許されないところがあったのですが、現在の那覇市になっている小禄、那覇、真和志、首里はほとんど帰ることが許されない。真和志村は帰れないものですから、金城和信さんが玉城の軍政府の近くにおられたようで、軍政府と交渉して真和志村民をここ米須に集めたそうです。ここには南部の掃討作戦をしていたアメリカ軍部隊のテントがありました。それが引き揚げたあとのテント小屋を真和志村民が利用することになりました。1946 年 1 月 20 日から 25 日にかけて集まりました。私は 25 日来ましたが、懐かしい顔に出会って私は泣きました。金城さんのところの貞ちゃん、信子姉さんと 3 人で一緒に行動しようねと言っていたのにそれが出来ずにいたので、二人のことが気になったのですが、いませんでしたのでがっかりしました。

割り当てのテントに行く道すがら、足を草むらに入れるとごろっとするのが人の頭。足の踏み場もないほどこの一帯は遺骨がごろごろしていました。畑の畔道、溝、テントが張られてアメリカ人が生活したというにもかかわらず、お骨がごろごろしているわけです。アメリカの兵隊はそのままにしていたわけですが、私たちはそのままにしておくことはできません。同じ人間として戦争で犠牲になった亡骸を踏みつけにしては人間の生活が始め

られないと、金城和信村長さんが考えられ、まず真和志村民は遺骨収集をやろうということで始めました。でもなかなか（アメリカ軍から）許してもらえなかったそうです。日参してやっと許しが出ました。そこには二人の娘を同時に失った父親としての思いもあったと思います。

ここに移動して 2 週間くらいで糸満高校が開校され、戦前の中学生、女学生は糸満高校に編入しなさいということで、40 名くらいが高校に通い始めた。男子生徒を先頭に、女生徒が 12 名くらい、ここから糸満まで通ったんですが、当時は国連軍がこの一帯を我が物顔で往来していました。危険があるということで、女生徒だけは朝は小さなトラックで送ってもらうこともあったのです。1 週間目くらいのそれがなかった日のことです。途中にバックナー中将の慰霊碑があり、米兵は毎日のようにお参りに来るのです。遊び人の黒人が一杯いるところの前を通らなければいけないのですが、二人の黒人兵から女生徒が追っかけられて一人がとらえられそうになったところを、男子生徒が石をどんどん投げつけて何とか女生徒を連れ帰るということがありました。そんな目にあってまで学問をする必要はないということで、女生徒は通学禁止になりました。

【遺骨収集】

そこで、女生徒はアメリカ兵の服から孤児の服を作る作業をしましたが、その後、糸満高校真和志分校が出来ました。その頃、遺骨収集はずいぶんやっていたので私たちもお手伝いしなければと思っていました。分校が出来てそこに通い始めてから、遺骨収集のお手伝いを始めました。高校の 3 年、4 年は収骨隊のおじさん達の指導を受けて、道具も何もないけど始めました。道端や岩陰、屋敷の軒、大きなガジュマルの樹の下などには家族ぐるみで座ったままの亡骸になっていました。戦後 7 か月たっていたので、畑に埋められているお骨が栄養になって、草やとうがん、サトウキビなど、緑が大きくなっています。その下には必ず人間が埋まっている、人間の肥料で草木が繁茂している。そこを掘ると間違いなく死体がある。逃げながら、あとで迎えに来るといって家族などが埋めていますから、深くは埋めていません。少し土を掘ると着物や髪などの姿が見えます。15、16 歳の少年少女がカマスを二

人一組でもって散乱している遺骨を拾いました。手袋もありませんので素手です。野ざらしになって、雨風に当たったものは朽ちています。けれども少し陰になると、まだ半分朽ちてない遺体もあります。衣服も着ています。髪もそのままあります。そういう遺骨をこの手で拾って、カマスに詰めるんです。骨って肉が落ちたら軽いと思うでしょうが、そうでもないです。二人分くらいカマスに詰めると、女の子ですと持つのが精一杯です。ここらあたりまでくる、力尽きて持てずに引っ張るというような状況です。十分食べているわけでもないので力も出ません。大変な仕事でした。引きずるように運んだ場所がここです。女生徒はアメリカ兵がうろうろしているので、CP（民警）という監視役がいます。「ひめゆりの塔」からこちらに来る途中の米須の部落が女学生の遺骨収集の場所です。不発弾に手を付けるなと注意されました。沢山ありました。「上からたたくな。あなたたちは、それだけを注意して表に出ているお骨だけ拾いなさい、掘り起こすな」と言われました。

繁茂している草木、ミニトマトの茂った所を取り上げたら、大きな頭と小さな頭が合わせて三つあるんです。親子というのがすぐわかるんです。親子３名が肥料になってミニトマトが茂ったんだな、と私も子どもながらに女ですので、このお母さんがどんな気持ちで子供を抱えて亡くなったかと考えると胸がつかえて、私も死んでいたらこんな姿になっていたのかな、と初めて思いました。頭が二つあって、手足が５，６名分の所もありました。直撃弾を受けて、頭が吹き飛んで胴体だけそこに残って、野ざらしになっているもの。死体の様子から見ても弾の雨からは逃れることができなかったんだ。弾は人を選ばない、無差別に殺していく。何でこんな殺し合いをしなければいけないのか。私は小さな親子の遺骨を見た時に、その日はいろいろ考えました。自分が３か月間弾の雨の中を必死に生きてきたこと、死にたくない助けに来てお父さん、お母さんと泣いたことを思い出したり、人間の生きたいという気持ちは、口には出さなくても体のどこかがそう言っている。だから必死に逃げて、生きよう、生きようとして遠くからここまで逃げて来たのに、この戦争のために命を奪われていった。この無残な死に方、こういうことが二度とあってはいけない。私たち生きているものがこれからやるべきことは、何だろうということ。ここで初めて考えさせられました。

骨拾いを毎日やったあと、夕方から黒板も何もない中で、先生方の話を聞くのが私たちの勉強の始まりでした。先生たちは、学問の話よりも、「君たちはいいことをやっているんだよ。えらいなあ」と。「あれだけのお骨を、毎日この手で拾い上げて、最初は納骨所に運んで。運ばれた人たちはきっと大変感謝しているよ。平和の守り神になってくれるはずだから、頑張って明日もやってね」と先生方は私たちを激励するのが大変だったと思います。これは尋常では考えられませんよね。それを続けてきました。

私の母がやったことを一つ言います。遺骨収集をした臭いが私に染み付いている。母と一緒に並んで寝た時に、あなたのそばには寄り付けない、この匂いは何とも言えないと言われました。家族のうち一人は食料探しに行くことになっていましたが、うちの母は芋も

掘らずにヨモギを拾い集めて持って帰るんです。近所の人たちは、どうして芋を掘らないでヨモギを探すのと言っていました。どこからか鉄兜を探してきて、その鉄兜でヨモギをつぶして、遺骨収集から私が返ってくるのを待っています。私が帰ると、このヨモギの汁で手足を洗い、そのあとは海岸の湧き水で手足を洗っておいでと、私の体に染みついている臭気を少しでも和らげようとしました。母の行為をありがたく思いました。

【慰霊祭の開催、慰霊碑の建立】

そのようにして２月の末に「魂魄の塔」はまだ完成していませんが、糸満地区の隊長が交代するということで、お礼の集会を兼ねて「魂魄の塔」の慰霊祭が初めて行われました。その慰霊祭の時に、幸い那覇にある真教寺のお坊さんと安里のお坊さんが生き残っておられて、一緒に供養をされました。翁長助静先生は、私たちと遺骨収集をしながら、慰霊祭の前にこの歌を作られました。「和魂（にぎたま）となりてしずむるおくつきの　み床の上をわたる潮風」という歌を作って私たちに聞かせました。あなた達も、歌でも短歌でも俳句でもいい、今の心境を何かに書き記しておきなさいと。その歌が戦後初めての鎮魂歌としてここに刻まれました。魂魄という名は、翁長助静さんと金城村長で相談して決められたそうです。あの碑の裏にその歌が刻まれていました。けれども、50 年経ったころからは読みにくくなりまして、これでは困る、いつまでもこの歌は残さなければいけないという私たち真和志ハイスクールの教え子たちが思い立ってあの新しい歌碑を建てました。

話は戻りますが、ここができた後、「ひめゆりの塔」に移ります。金城和信村長の次女の貞子さんが、第３外科壕にいたことを同窓生のイハフミコさんから聞き、貞子さんの最後が今のひめゆりの塔の所とわかったので、ご両親も遺骨を拾うために中に入りました。しかし、もうお骨らしいのは残っていませんでした。その 2、3 日後に私と同級生、お坊さんお二人、翁長助静さん、収骨隊のおじさんたち７名で初めて「ひめゆりの塔」の下にある壕に入りました。ロープ伝いに入っていきました。既にアメリカ軍がガソリンか何かよく分かりませんが、みんなの推測では火炎放射機ではなくガソリンだろうということでしたが、骨らしいものは残っていませんでした。壁際を探すと、石鹸箱とか、万年筆とか

焼け残った髪とか、そういうものが少しあるだけでした。あの壕の中で亡くなった 60 数名のお骨はありませんでした。拾い上げたものは、金城さんの奥さん、貞ちゃんのお母さんが奇麗に洗い清めて、石川におられる学徒の引率者だった仲宗根政善先生のところに届けられた。

（壕は）危なくて覗けませんでしたので、周辺をきれいにして、淵には石を積み上げて、おじさんたちが土を入れて、近くの野山から球根を探してきて植えたりしました。1、2 年は咲きましたが今はありません。そういうようにしてできたのが「ひめゆりの塔」です。そして 4 月 7 日に村民をあげて、糸満にも同窓生が何人かいたので、その方も呼んで慰霊祭をやりました。

それからひめゆりの乙女たちだけではなくて、沖縄戦でなくなった女学生も一緒に祭ろうというのが第 1 回の慰霊祭でした。続けて、男子生徒のことも真和志小学校の校長先生をしておられた大瀬良三郎先生の次男が、師範健児隊の中におられたということで「健児の塔」が見つかりまして。白骨がごろごろしている、戦車がひっくり返っているすごい情景の摩文仁岳にみんなで高校の男子生徒、4 年生たちが村長さんや奥さんや何人かのリーダーの方たちと一緒に「健児の塔」を探し求めて、見つけてきました。行った時に感じたことは、中に入ると毛布にくるまって二人が抱き合っている遺骨や、まだミイラ状態の人も何人かいました。遺族が見たらすぐわかるくらいのミイラもありました。そのミイラ状態になっている人は、崩す気持ちにはならないですよね。そっとして帰ってきました。そこは収骨せずに、あとで、その中に納骨堂が設けられて、真壁村の村長をしておられる方が提案されて中に納骨堂を作られて「師範健児の塔」として今祭られています。

【おわりに】

私たちは遺骨収集を「魂魄の塔」から初めて、「ひめゆりの塔」、「健児の塔」まで真和志村民はここにいる 4 か月間でこれだけの仕事をして、5 月には自分たちの村に近い嘉数台地に移動していきました。その後、「この村の人たちは、これだけの遺骨のある田畑をどのようにして開墾していったんだろう」と 1 年あと、2 年あと、ここに立ち寄るたびに思いました。

鍬を振り上げてはいけないよ、下に弾が潜んでいるかもしれない。小さなショベルで横から土を起こすんだよ。「ウンチケーラビラ（ご案内致します)」、「グブリーサビラ（失礼します)」。骨を拾うときに「グブリーサビラ」と挨拶をして亡くなった人を驚かしてはいけないよと、おじさんたちの教えがまだ身に染みています。お骨を拾う前に必ず、「グブリーサビラ、ウンチケーラビラ」と「失礼します。私たちがこれからあなたたちを連れてご案内しますよ」とお祈りしてからやりなさいと言われました。あの気持ちが、今でも何かの時には出てきます。だから人間は死んでも魂は神様になって平和の守り神になっていらっしゃるから、私はこの 70 年間いろいろとほかのことはありますけど、戦争もなく平和で暮らすことができたんじゃないかと思っています。原爆で亡くなった方々も、自分た

ちのような目に会わせたくないという思いで、みんなを守って下さっていると思います。

沖縄戦で亡くなった人、南方戦で亡くなった人、日本という国はあらゆるところで戦争を起こして沢山の人を殺しています。だからこのような戦が二度と起こらないためにも、歴史を皆さんしっかり受け継いで、あなた方が大人になった社会でも平和が続くように世の中の動き、世界の動きを見つめて、平和な暮らしができるように行動してほしい。こんなに一生懸命勉強してくださる後輩たちがいると思うと、このおばあさんはとても心強いです。ですから、これからも沖縄だけではなくて、平和に関する、平和な世界を創るための活動を頑張ってやってくださいね。

私は自分の心に残っているうちの十分の一も話はできません。3か月間の鉄の暴風の中を生き延びてきましたので、1時間や2時間で話せることではありませんけど、今、私の心の中にあることを皆さんにお伝えし、亡くなられた皆さんにも平和の守り神としてみんなを守ってくれてありがとうという感謝の心をもってお祈りしています。今日は私の話を聞いてくださってありがとうございます。「健児の塔」、「平和の礎」に行かれたら真和志村民がやった足跡が残っているので見学してきてください。ありがとうございました。

伊佐真一朗さん講話
（沖縄戦上陸、嘉手納基地、沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリートについて）
平成 31 年 3 月 2 日

【沖縄戦上陸について（北谷町：砂辺馬場公園にて）】

沖縄本島は、よく北部、中部、南部にわけて説明されますが、中部の北谷と書いてチャタンと読みますが、そこにいます。手を向けている方向が北で、向こう側から嘉手納町、読谷村（よみたんそん）と続いてきます。この海岸線の端に行くと、残波岬（ざんぱみさき）という岬がありそこからここまで平坦な海岸が続いています。

沖縄戦で米軍が上陸する時の条件として、日本軍の攻撃をできるだけ避けられる、大量の兵隊や物資を一気に陸揚げできる、上陸後敵と戦闘するのに十分な準備ができる、いろんな条件が考えられます。そのような条件から候補になったのが、ここの海岸と南の浦添、小禄、中城湾、具志頭（ぐしかみ）などが挙げられて、最終的にここの海岸が上陸地点になります。見てわかるとおり、ここは 10 キロほどの海岸になっていて、途中に比謝川（ひじゃがわ）の河口がある以外はずっと砂浜です。ということはこの海岸全部を使って一気に上陸させることができる。地図上で色分けして、部隊ごとに上陸作戦を進めて行ったようです。上陸部隊の後方、沖合には戦艦、ロケット砲などを積んだ船で上陸作戦を支援する。地上の爆撃を続けている間、日本軍の攻撃を防いで上陸を行う、という上陸作戦だったと言われています。1 日で 1 万 6 千人位上陸して、最終的には 18 万人が上陸したと言われています。米軍にとっても太平洋戦争の最大規模の上陸作戦と言われています。

この海岸が選ばれた非常に大きな理由があります。日本軍の飛行場が二つありました。北飛行場と中飛行場。これは昭和 18 年くらいから建設が進められて、当初、日本軍は沖縄を航空作戦の拠点としようとしていた。第 32 軍は特攻機の配備もずっと要請していました。それは実現しなかったので、米軍上陸直前に飛行場としては使わないことになり、米軍に使わせないために破壊命令を出します。ただし、米軍にとっては手直しすれば使える。米軍は上陸後 1 週間以内には飛行場を確保できるだろうと考え、この場所が選ばれた

理由の一つになっています。

もう一つは、ここから陸の奥まで平たんな地形なので、上陸後の物資をストックする場所を確保できる。日本軍は、米軍がそう考えるだろうと予想していましたが、ここで迎え撃つことはしませんでした。何故かというと、日本軍の兵力では太刀打ちできるはずがない。海岸線で迎え撃つとすれば、その時点で沖縄の日本軍は全滅してしまう可能性があった。それよりはあえて米軍を上陸させて、ここから南の首里、その手前の浦添、西原、宜野湾、中城（なかぐすく）一帯に地下陣地を設けて本格的に戦う。日本軍としては、浦添や西原の複雑な地形を使って米軍をくい止める、すなわち兵力が足りない分、地下陣地を使ってまかなおうという考えでした。要は、日本軍の作戦は、米軍を沖縄に来させないということではなく、沖縄でくい止める、足止めにして日本本土への進行を遅らせるということだった。一方、本土で何があったかというと、例えば鹿児島や宮崎で、米軍の本土上陸作戦の準備をしていた。それには時間が必要だった。

米軍は、沖縄を占領すればその後の本土への作戦がスムーズにいくので手に入れたがったということがあります。例えば、サイパン、テニアンといった島と比較すると、沖縄は日本本土に随分近くなる。沖縄であれば、本土爆撃も燃料を少なくして爆弾を多く積むことができる。航続距離が短い小型の飛行機でも作戦に参加できる。このように、沖縄を手に入れれば本土の攻撃を効率的に行える。実際に４月３日には、飛行場を占領し、偵察用の小型の飛行機が使用を始めます。１週間後には海兵隊の戦闘機部隊が配備される。４月、５月、本土から日本軍の特攻機が来ますが、これを迎撃するのが沖縄のアメリカ軍の最初の任務です。特攻作戦が落ち着くと、九州各地への空襲に沖縄から参加する。

ということで、現在の沖縄の米軍基地は、この時の本土攻撃作戦の作戦拠点がベースになっています。沖縄の米軍基地の最初の任務は、日本本土を攻撃するということだったと言えます。米軍が沖縄戦の作戦拠点として基地を作っていく、そうすると飛行場があった場所に追加して飛行場を作っていきます。そこには、集落や農地があったわけで、それがことごとく破壊されていく。この時、住民は避難して村にはいませんから、無人の集落を基地に作り替えていった。そうすると戦後、住民が戻ってきても集落が跡形もない。どこに行けばいいのという、生き残った人は新たに住む場所を探さなければいけなかった。今

の沖縄の問題は、この当時の沖縄戦と深いつながりがあるということです。
　周辺の紹介をします。ビーチの向こうに、嘉手納飛行場の滑走路の誘導施設がみえます。この周辺は、米軍関係者が主に住んでいる地域です。嘉手納基地に近いので、米軍関係者向けの不動産が多く作られています。階級の低い米軍兵士は寮暮らしだったりしますが、上位職の人は住宅手当をもらって基地の外に住むことができます。北谷町のここはアメリカ人が多いという特徴的な地域です。
　質問はありますか。

【質問】
　本によっては、台湾に兵力を抜かれる前は上陸地点で迎え撃とうという考えもあったと書いてありますが、どうだったのでしょうか？

　その通りです。昭和 19 年までは第 9 師団という北陸を拠点とする部隊がいました。師団というのは、1 万人以上の兵隊がいるわけですが、この兵隊が 12 月から 1 月にかけて台湾に移動します。第 32 軍は 10 万人位いたうちの 1 万人弱が持っていかれたので、残った兵力では中部の防衛をあきらめざるを得なかった。
　第 9 師団の移動後、第 32 軍は大本営に他の部隊の派遣をずっと要請していましたが、それも叶いませんでした。本土と沖縄の間の海はすでに危険だったので、大本営は確実に兵力を送る保証が全くなく、その危険を冒してまで兵力を送る作戦はとらなかった。第 32 軍の部隊の中には飛行機で運ばれた部隊もありましたが、それには限度があって残っている部隊で戦わざるを得なかったということです。

【嘉手納基地について（道の駅かでなにて）】

　嘉手納飛行場です。運用部隊はアメリカ空軍ですが、海軍の部隊も入っています。実際には、海兵隊も陸軍も含めて米軍のあらゆる飛行機が来るのと、現在、北朝鮮の「瀬取り」の監視任務でオーストラリア空軍の飛行機なども最近は来ます。

正面の半円形の建物や三角屋根の建物は戦闘機の整備格納スペースで、左側のエンジンが二つ付いている飛行機のあたりは海軍のエリアです。左の方にあるのは対潜哨戒機Ｐ－８Ａポセイドンという飛行機で海軍が運用しています。潜水艦や船に対する捜索、攻撃を任務とする飛行機です。真ん中あたりは戦闘機のエリアで、右の方に行くと輸送機が固まっています。一番端に、今では日本の空でほとんど見ることのないボーイング 747 ジャンボジェットがあります。あれはアメリカ軍の輸送を受け持つ下請けの民間企業というのがいくつかあって、そのうちの一つが来ています。アメリカ本国や、日本の横田、三沢、在韓米軍と連携しているので、割と頻繁にそういうところの飛行機の行き来があります。

現在は滑走路 2 本の大掛かりな飛行場ですが、現状でこの機能を目一杯使っているわけではありません。しかし、東アジアに緊張関係が生ずれば追加して部隊が派遣され、飛行機が増援されるというような受け入れ体制もあると聞いています。

基地の話で一つ都市伝説があって、基地はカリフォルニア州の領土みたいな話がありますが、事実ではありません。基地の土地は、アメリカ軍の所有ではなく、安保条約の地位協定で日本がアメリカ軍に区域・施設を提供するということになっています。地権者から国が借りて、アメリカ軍に使ってもらっているということです。土地の権利がアメリカ軍に渡っているのではなく、土地を管理しているのは防衛省ということです。だから、カリフォルニアでも何でもありません。中にも一応住所はあって、もともとの沖縄の地番があります。

この広大な土地は、沖縄戦の前は田畑が広がる集落で、中には村がいくつか点々とありました。これだけの地域が基地に取られると、ここに住んでいた人たちはどこに行くかという問題が生まれます。沖縄戦が終わった時、基地が何年残るかということは、当事者であるアメリカ軍にも判りませんでした。おそらく冷戦がなかったら、あるいはテロ戦争がなかったら、日米の関係が今のようでなかったら、現在のような基地があったかどうかわからない。少なくとも終戦の時点で、この基地がいつまで残るか判らなかった。多くの沖縄の人たちは、近いうちに帰ってくるだろうと思って基地の近くに住んでいました。それが固定化されて、まさか 70 年以上もアメリカ軍基地があるとは思っていなかった。そういうことで、沖縄県民とアメリカ軍は戦争が終わって 74 年の付き合いなので、喜怒哀楽いろんな関係、思いがある、ということを付け加えておきます。

ちなみに滑走路は 3,670 メートルありますが、地形が丸みを帯びていますから、滑走路の端は見えません。ここからは滑走路の半分しか見えないということです。なので、向こうから着陸してくる飛行機があれば、ここからだといったん視界から消えて、見えないところに着陸してその後しばらくして登ってくるという感じです。若干の勾配があります。見えている以上に広いということです。

反対側、後ろのジャングル地帯はほとんどが嘉手納弾薬庫というもう一つのアメリカ軍の基地です。嘉手納飛行場より一回り大きいです。ジャングルにしか見えませんが、弾薬庫はすべて地下に掘り込んでいるので、森林地帯にしか見えません。よく観察すれば、弾薬庫のゲート入り口が見えたりします。どれだけの弾薬が保管されているかは調べてみましたが判りませんでした。軍事機密ということでしょう。広さからしても、すごい量だろうと思いますが、これだけの弾薬庫があり、広大な基地がある。それもここだけではないということを考えると、アメリカ軍にとっての沖縄の重要性というがあるのかなと思っています。質問はありますか。

【質問】
基地内の郵便を出すときの住所はどうなるのでしょうか？

先ほど沖縄の地番があると言いましたが、基地の中はアメリカ軍が使っている住所があります。これは、何丁目何番地という書き方ではなくて、APO という単語で始まる数字とアルファベットの記号です。基地の中は、住宅地と違って軍の機関なので、軍の機関に郵便を出すという流れになります。APO というのはハワイにある軍事郵便を扱う部署の名前です。

【質問】
核が貯蔵されていたのではというのはここですか？

弾薬庫は辺野古にもあるので、辺野古にも貯蔵されていたのではと言われています。

【質問】
今はその可能性はないのでしょうか？

アメリカ軍はイエスともノーとも言いませんからわかりません。ただし、持ち込んで運

用していたとしても不思議ではないと思います。

【質問】
弾薬にはいろいろな種類がありますが、その他には例えばどんな弾薬があるのでしょうか？

アメリカ軍が運用する兵器の弾薬はある程度はここで賄えるのではないでしょうか。ただし、兵器の種類とか貯蔵量というのは、基地の能力の話になるので高いレベルの軍事機密になると思います。これは聞いた話ですが、弾薬庫は米兵であっても自由に出入りできない2重のゲートが設けられているそうです。行き来している飛行機を見ると、あらゆる可能性に対応する柔軟性は持っているのではないかと僕は思っています。

【質問】
嘉手納基地は日本軍の中飛行場を拡張したのだと思いますが、どれくらい拡張したのでしょうか？

中飛行場の滑走路は1,000m弱なので、今の嘉手納飛行場の5分の1とか4分の1くらいだったのではないでしょうか。中飛行場は、読谷に在った北飛行場の予備飛行場でしたから、それよりは小さかったはずです。だとすればここから見える範囲に収まっていたと思います。

【質問】
占領下で住民がいない時に整備したということですね。

アメリカ軍は上陸後、民間人を収容する収容所を建設します。生き残った人たちは基本的に収容所だけに入れて管理する。1945年10月下旬までは、収容所以外に沖縄の人たちはいないという状態になっていますので、その間に基地を拡張していったということです。

【沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリートについて】
沖縄ヒストリートの所蔵資料は、市民の方々からの寄贈です。写真もプロのカメラマンからの寄贈だったりするので、お金を出して集めたわけではありません。例えば、復帰前に使われていたドル札、琉球切手といって復帰前の切手、基地で働いていた人の記念品、日用雑貨などいろいろあります。
このような古い時代のものを並べて結構喜ばれるのが、年配の方です。老人ホームのデイサービスの方であったり、公民館の事業で地域の方などが昔を懐かしんで良く来られま

す。豆腐を作る道具とか、昔使ったそろばん、弁当箱、テレビ、ラジオ、ジュークボックスなどを展示していて、年配の方がこういう風に使っていたという話をしてくれます。僕らにとってはその話が重要で、要するに道具一つから語られる沖縄の歴史というのはユニークです。1972 年までは沖縄県というのは存在してなくて、アメリカの支配する琉球政府という沖縄だったわけで、日本語は話すけど、使うお金はドル、交通ルールはアメリカと一緒、英語が話せる人は基地の中で働けるという今とは違う個性的な時代で、その時代の話を聞くことができて本当に面白いです。それは、戦争で生き残った人たちが、戦争でいろんなものを失った後に、どのように生きて来たかという時代でもあります。工夫と苦労の積み重ねだろうと思っていますけど、例えば、戦争後、アメリカ軍は旧式の戦闘機などを穴を掘って捨てていくのですが、それを掘り出してアルミを再利用して鍋を作ったり、基地の中に入って見張りのアメリカ兵をだまして食べ物を持ってくるという様な話はいくらでもあります。そういった話を嬉しそうにします。生き残った人たちの力強さというものを、僕はそこで実感します。

僕の祖父は、方言と英語が上手でした。日本語はよくわからない。基地で働いていたようなお年寄りによっては、戦争体験の話をしていても時々英語が出てくる。沖縄で戦争体験の聞き取りをすると 3 か国語くらい必要になる。英語も中学校で習うような英語ではなく、基地の人に習った英語です。だから英語一つとっても、時代性や社会性というのが浮かび上がってきます。その辺が人々の話を通して見えてくる歴史の面白さだと思います。

この施設の前の通りはゲート通りと言って、嘉手納飛行場のちょうど反対側になっています。滑走路、基地を挟んでその反対側に第 2 ゲートというのがあって、これは嘉手納飛行場の住宅エリアに面したところで、人の出入りが多いところです。基地の中で衣食住や医療なども賄えますが、基地の外にアメリカ兵向けの店を開く人が沢山いて、そうしてできたのがコザという地域です。沖縄戦の前までは畑と墓地があるくらいで、集落はここから少し離れたところにありました。基地が出来て戦後の街の中心はこの辺りになりました。ここは、沖縄戦の前は人が住んでいる地域ではなかった。基地の人たちに対する商売と言っても色々あって、ライブハウス、レストラン、バーやクラブという飲み屋、ホテル、あとは日本製のカメラ、時計、日本人形などのお土産屋さんなどです。休日に遊びに行くところなので、理髪店や、軍人が好きな服に着ける刺繍屋さん、スーツの仕立て屋などが並んでいました。

メインのこのゲート通りと、もう1本ビジネスセンター通りという2本の通りがあります。三沢、横須賀、佐世保などにも似た雰囲気の街があります。さっき、基地との関係は喜怒哀楽いろんなものがありますと話しましたが、よい関係もあった一方で衝突することもあったわけですね。その象徴的な出来事がこのコザ暴動です。1970年の12月20に発生しました。何が起こったかをざっくり言うと、沖縄の人たちがアメリカ兵の乗った車を全部ストップさせて、中にいた人を引きずりおろして火をつけたて燃やしていったという事件です。83台のアメリカ兵の車が燃やされ、負傷者も出ました。

もちろん何もないところから起きたのではなく、背景があります。1970年というと、沖縄の復帰運動が盛り上がっていた時です。それからアメリカ軍に対する不満がたまっていた時でもありました。例えば、飲酒運転をしたアメリカ兵に女性がひき殺されたり、男の子がひかれたりしましたが、きちんとした補償、賠償、裁判があるかというと、全てがアメリカ軍優先で処理されてしまう。こういったトラブルがあった時に、沖縄の人が圧倒的に不利になる。泣き寝入りするという状況が続いていたわけです。それらに対する不満が溜まっていた時代でもありました。

12月20日も、アメリカ兵が沖縄の民間人をはねるという人身事故がありました。死者が出るほどの事故ではありませんでしたが、そこにアメリカ軍の憲兵、MP(ミリタリーポリス)が来て取り調べをしました。周りに住民が集まって推移を見ていた。集まっていた人達に対し、MPが空に向かって威嚇発砲した。これがきっかけで暴動に発展しました。この日だけであと2件事故が起きています。

事故現場があった中の町という所は飲み屋さんが沢山あるところですが、忘年会シーズンで酒を飲んでいる人が沢山いた。一旦暴徒に火がつけば、誰かがそれを止めるという状態ではなかった。そのような不安定な状況の中に、アメリカ軍支配下の沖縄はあったということです。

先ほど言ったように、この辺りはアメリカ兵を相手に商売をする場所ですが、事件後、軍はこの地域へのアメリカ兵の立ち入りを禁止します。そうすると商売をしている人は死活問題になる。アメリカ人もクリスマスシーズンで消費が高まる時期だったが、お店はそれが全部パーになった。ここで商売やっていた人には悪夢のような状態だった。年明けに街の人たちの要望で、徐々に規制が解除されますが、基地の街の不安定な要素が浮き彫りになった事件でした。

「コザ暴動」という言葉ですが、アメリカ軍報告書に使われたKOZA Riotという言葉を、ヒストリートではそのまま訳して使っています。言葉が統一されているわけではなく、それぞれの考え方で「騒動」という人、「騒乱」という人、「事件」という人もいます。ヒストリートは、現在、「コザ暴動」という言葉を使っていますが検討の余地はあると思っています。即ち、事件に対する評価もいろいろあるということを考えて欲しいと思います。

事件の起こった範囲は、第2ゲートから国道330号線を右折して山里三差路というとこ

ろまでで、歩くと少なくとも 15 分位かかる広範囲にわたっています。この時代はアメリカでは白人と黒人の人種問題もあり、コザの街でも白人と黒人の喧嘩が絶えない、危なっかしい時代だったという人もいます。沖縄でも黒人解放運動が行われたり、アメリカ社会の問題も持ち込まれていたということは興味深いと思っています。

質問があればお願いします。

【質問】

暴動はどのように鎮圧されたのですか？

アメリカ軍と沖縄警察が急遽出動しました。暴動に参加した人たちは、米軍司令部のある南の方向に進み、最終的には司令部の前に武装したアメリカ兵が並んでストップさせたということです。

【質問】

逮捕者も随分出たのか？

結構出ました。この事件の特徴は、誰がリーダーだったのかわからないことです。自然発生的に広がったというのが大方の見方で、明確に誰が主導したのかということは見えてこなかった。当然、ワシントンでもショックを受けます。沖縄の米軍基地は大丈夫か、沖縄の住民との関係は大丈夫か、基地と沖縄住民と関係改善の余地を考える契機になったと思います。

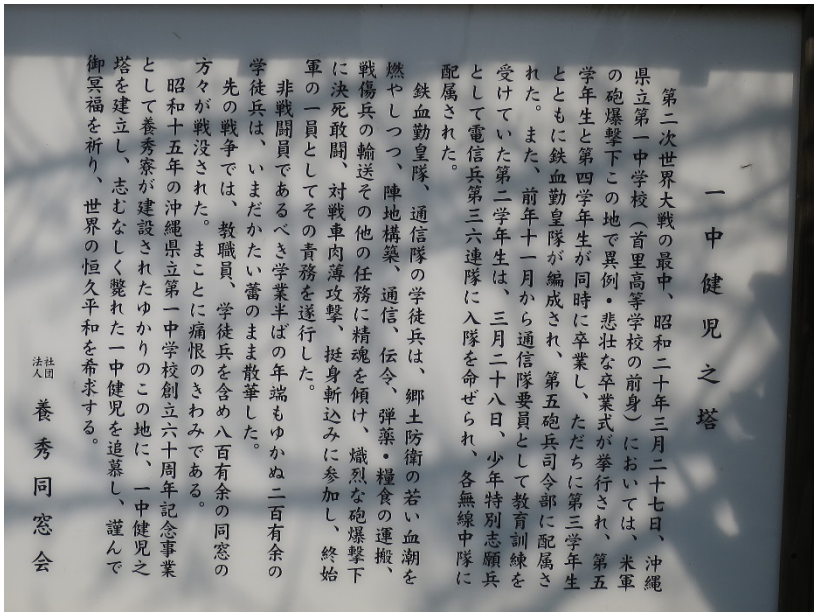
大田光さん講話（一中学徒隊と <u>養秀会館</u>（注）について）
平成 31 年（2019 年）3 月 2 日

一中生徒の学徒隊への動員

沖縄戦では男女（それぞれの）学徒隊が動員されました。当時の学校制度は、義務教育は小学校までです。当時は国民学校と呼ばれていました。そこを卒業すると、進学する場合は男女別々の学校になります。女子は高等女学校、男子は中学校あるいは実業学校です。沖縄本島内では、女学校７校、男子が通える中学校や実業学校が９校ありました。これらの学校すべてで学徒隊が編成され、沖縄戦に動員されました。

県立第一中学校はその一つです。現在は県立首里高校になっています。学校の歴史は琉球王朝の時代までさかのぼります。沖縄県内で最も歴史の古い学校です。当時の中学校は１年生から５年生まであります。約 1,000 人位が通う学校でした。県内各地から秀才が集まるトップクラスの進学校でした。北部、中部、南部だけでなく離島出身者もいます。下宿生活や寮生活をしながら通っていた生徒もいます。約 300 名が学徒隊として動員されます。年齢にすると 14 歳から 18 歳です。

当時日本には徴兵制度があり、男は兵役の義務がありそれは 19 歳からです。その年齢に達していませんから、兵役の義務はありません。しかし、行政、軍、学校などが、学生を戦場に動員していく道筋を作りました。県立第一中学校でも 1945 年(昭和 20 年)3 月 24 日に動員命令が軍から下りました。当時の男子学校には、軍から派遣された配属将校と呼ばれる軍人がいて、この配属将校と 5 年生が中心となって召集令状を作って各生徒に配って、集まった約 300 人が動員されています。正確な人数は分かっていません。動員の際に名簿を書かされたようですが、それも戦争で無くなっています。「この人は学徒隊だった。この人はそうじゃなかった」というように生き残った人の証言でしか分かりません。動員されたのは 2 年生からです。これは陸軍の規定で、14 歳以上であれば志願すれば入隊できるとなっています。1 年生は対象外なので、学徒隊として動員されていません。2 年生が通信隊、3 年か



ら5年生までが鉄血勤皇隊という名で動員されています。それらを併せて男子学徒隊と呼んでいます。

後ろに写真がありますが沖縄戦で亡くなった一中の生徒、先生です。向こう側が先生で、5年生4年生と学年ごとになっています。写真がない生徒もいますのでこれが全員ではありません。中学校当時の写真がなくて、小学校時代の写真の子もいます。県立第一中学校に関しては、動員後の任務は後方支援業務です。水、食料、荷物を運んだり、命令の文書を届けたりという任務で、実際の戦闘に出されたという生徒は少ないと思います。ただ、部隊によっては全員戦死したり、病院壕では生き残ったのが二人ということもあり、確実ではないですが証言を総合していくと後方支援だったのではないかと思われます。

5月末に司令部が首里から南部に撤退しますが一中の学徒隊も行動を共にします。6月に入ってからは、ほとんどの部隊が壕から出られる状態ではなかったようですが、6月20日ごろ各部隊で解散命令が出ています。解散命令が出ずに、そのまま切り込み攻撃に出された部隊もあります。手榴弾一つ持ってアメリカ軍に飛び込んでいくというものです。2年生の通信隊は115名動員されていましたが、65名亡くなりました。3年生から5年生までの鉄血勤皇隊は200名ほど動員されていたと言われていますが、そのうちの150名ほどが亡くなっています。以上が一中学徒隊の概要です。

宮平盛彦（みやひらせいげん）さんの体験

今回、宮平盛彦さんから話を聞く予定だったのですが、インフルエンザにかかって既に元気になられたのですがまだ外に出られないということで、直接お話を聞くことができません。それで、少し宮平さんのお話しをしてみようと思います。ただし、宮平さんのお話しは私の中でも十分整理できていないところがあって、上手に話せるかどうかわかりません。宮平さんがこういう話をしようとしていたということと、私が9年間宮平さんといる中で私から見た彼の苦しみであったり、今の思いというものをお話ししてみたいと思います。

宮平さんは写真があまりないのですが、ここに写っている人です。当時14歳です。一中の2年生でした。本人曰く、すごく体が小さかったそうです。140センチくらいしかなかったそうです。西原町という、首里から少し北の出身です。そこに家族といたのですが、同じ集落の先輩が「学徒隊が編成されるので、学校に行かないといけないよ」と呼びに来たそうです。

それで宮平さんは首里に来て、通信隊として動員されます。電信第36連隊第6中隊に、同級生34名と配属されます。その中で、宮平さんは分隊派遣といって、中隊の中で仕事をするのではなく、最前線の部隊に書類を届けるような外でいろいろ動く側だったそうです。首里城の地下に日本軍の司令部がありましたが、その横に通信部隊の壕があったそうです。よくそこに文書を取りに行って、その文書を各部隊に届けていたそうです。5

月の終わりに南部に撤退し、6 月に入ってからは通信隊としての仕事はほとんどしていないと言っていました。水汲みや食料運びばかりだったそうです。

解散命令を受けて、宮平さんは仲の良かった日本兵と一緒に北部の国頭（くにがみ）に行けばまだ戦えるだろうといううわさを聞いて、北部を目指したそうです。東風平（こちんだ）という地域に大きな部隊が入っていたと思われる大きな壕があって、そこに 2 か月くらい隠れていたそうです。8 月くらいになって北部を目指してその壕を出て南風原の津嘉山（つがさん）という大きな壕に行きました。そこは日本軍が司令部として使っていた壕で、食料も沢山あったそうです。そこに 2 か月くらいいたそうです。そこには宮平さんたちだけでなく、別の日本兵のグループもいたそうです。

10 月に入ってから、壕の入り口に人が来るようになって、戦争は終わったから出てきなさい、大丈夫だよと呼びかける人がいました。ある時、その人たちが中まで入ってきて、戦争は終わった、負けたという話をしたそうです。壕の中に隠れていた別グループの日本兵が、これは敵のスパイだと思って、呼びかけに来た 2 人の日本兵を射殺しました。宮平さん曰く、たぶん県外の日本兵だったと思うということでした。宮平さんはその光景を見ていたわけで、壕の中にいて情報がない状態だったので、宮平さんもスパイかもしれないと思ったそうです。その後、別の人たちがまた呼びかけに来て、中までは入ってこなかったけど、新聞などを入口の所に置いていったそうです。それを見た壕の中の人たちが、本当に戦争は終わったのかもしれないと考えるようになって、11 月に壕から出て収容所に入ったそうです。その後、宮平さんは家に帰ります。しかし家族は全員が亡くなっていました。

50 年以上話せなかったこと

宮平さんは、自分たちを助けるために呼び掛けに来て射殺された二人の日本兵のこと、その現場に自分がいたことを 50 年以上話せなかったそうです。しかし、戦争の体験などをだんだん話すようになった時に、これはやはり葬ってはいけない事実だと考えるようになって、50 年以上たって話されるようになった。私が初めて宮平さんにお会いしたのは 2010 年（平成 22 年）、大学 4 年生の時です。私は、学徒隊のことを卒論のテーマとしたのでその関係で宮平さんにお話を聞かせてもらいました。宮平さんは、自分が直接手をかけたわけではないが、助けようと来てくれた人を射殺してしまった。その現場に自分もいたことが、非常に苦しかったようです。私が何回か話を聞かせていただくなかでもこの話がよく出ました。

今から 4 年前、宮平さんから急に電話があり、「近いうちに時間が空いてないか？　戦争体験者として話しておきたいことがある。どうしても心に引っかかっていることが一つある。それをわかっていてもらいたいから、聞いてくれないか」と言われました。その 1 週間後くらいにここでお会いしました。私は、てっきり宮平さんが射殺現場にいたことに関連した話かと思っていました。しかし、そのことではなく、どうしても家族のことを話

しておきたいということでした。

それまで宮平さんから何度も話を聞いていましたが、家族のことを宮平さんはあまり話すことはありませんでした。全員が亡くなったこと、どのあたりで亡くなったかということは聞いたことがありました。地元の先輩が呼びに来た時に、お母さんは「あんたみたいな小さい子が行っても何もできないんじゃないか。そんな危険なところに行ったら危ないから。心配だから」とずいぶん引き留めたそうです。でも宮平さんは、「大丈夫だから。すぐに帰ってこられるから」と言ったそうです。14 歳の宮平さん自身は物心ついた時から「日本は神の国だから、絶対戦争に負けない。この戦争は正義の戦争だから」と聞いていて、実際学徒隊に動員されてもすぐに帰ってこられるだろうと思っていたそうです。だからお母さんを振り切って学徒隊に動員されたんですね。宮平さんは 6 人家族で、ご両親とお姉さんが二人、妹が一人いました。2 番目のお姉さんはすでに結婚されていて旦那さんの家族と一緒に行動しています。沖縄戦当時は、ご両親と一番上の姉、妹の 4 人で行動していたようです。

5 月の中旬以降、宮平さんが通信隊として文書を配っている時に、首里の近辺で攻撃が激しくなった時に近くの壕に逃げ込んだら、偶然にもそこでお母さんとお姉さんに再会します。宮平さんの家は西原ですので、「なんで首里まで来たのか」とびっくりして訊ねると、「あなたのことが心配で追いかけてきた」ということでした。その後、宮平さんは自分の部隊に連れて帰って上司に面会し、今後沖縄戦がどうなるかというような話をお母さんと上司がしたようです。それは南部に撤退する直前だったようです。

その後、家族と別れて宮平さんは南部に撤退します。6 月に摩文仁の壕から別の壕に移動するときに、お姉さんと畑のあぜ道でまた再会した。お姉さんは宮平さんに抱き着いて泣きじゃくったそうです。「どうしたの？」と聞くと、ここに来る途中、隠れる壕がなくて民家に家族で入っていたらそこが攻撃受けてご両親と妹さんが亡くなったとのことでした。「私一人になったから、盛彦（せいげん）、連れて行って」とお願いされたそうです。

でも、宮平さんは部隊の移動中なので、泣きじゃくるお姉さんをなだめて断ります。その後、解散命令を受けて北部に行こうとするわけですが、その時に親戚のおばさんに会って、お姉さんが海岸で機銃掃射を受けて足をけがして亡くなったことを聞かされます。その後は、先ほど話したように、3 か月以上転々とし

て、戦争が終わって帰ってみると、おばさんの言った通り家族全員が亡くなっていました。

宮平さんにとっては、家族のことを話すのが一番つらいみたいです。あの時、引き留めたお母さんのいうことを聞いて自分が学徒隊に入らなければ、自分を心配して首里に来ることもなかったのではないか。首里から南部に逃げることもなかったのではないか。最初に家族が入っていた西原の壕はほとんどの人が助かっているので、こんなことにはならなかったのではないか。南部でお姉さんに助けてと頼まれた時も、自分は手を振り払って断ってしまった。それが自分の中ではどうしても気持ちの整理がつかないようです。

戦争体験を話すということ

宮平さんは西原町にお住まいで、町の戦争体験を語る人のリストに登録されていますし、首里高校やここでも戦争体験を語ってくださいました。話さなければいけないという思いもあって、比較的戦争体験を語ってきた人ではありましたが、この 3 年くらい話せなくなっています。今回、体調が理由でお話しできませんでしたが、皆さんの依頼を受けられたことを、私は正直驚きました。2 年前に私の知り合いからの依頼で宮平さんに講話をお願いした時、体験を人前で話すのがしんどいと言われました。「戦争体験を人前で話すと思った日から、眠れなくなる。85 を過ぎて夜眠れなくなるのは、気持ち的にも身体的にもつらいので体験を話すことはやめたい、もちろん、大田さん一人を前に聞き取りの相手になることは協力するが、人前での話はやめたい」と言われました。そう言いながらも本人は挑戦しようと思われていて、去年、(6 月 23 日の）慰霊の日の前に沖縄では学校の平和学習がありますが、その講話を中学校から依頼され一旦は受けられたのですが、1 週間ほど前になって私に代わってほしいという相談がありました。

このように、ここ数年で体験を話すことが宮平さんにとって難しくなっているようです。これまで比較的話してきた人でも苦しんでいる。私は、宮平さんだけではなくて他の戦争体験者の方も存じていますが、一つ確信していることは戦争体験者にとってこういう苦しみが終わるときはないと思う。多分宮平さんもずっと抱えているのだろうと思います。宮平さん自身が何かをしたというわけでなくとも、宮平さんの心の中には射殺の現場にいたということもそうだし、家族のこともそうだし、自分のせいでこうなったのではないかと自分を責める意識が消えていない。それは周囲の人がいくら違うと言っても、本人の中では気持ちの整理がついてないのだろう、と私は感じています。

戦争で亡くなった方の無念や悲しみはもちろんですが、同時に宮平さんのように生き残った方の苦しみ、というのも考えてみてほしいと思う。戦争体験者の話を聞けるというのは当たり前のことではなく、まだまだ話せない人もいる。そんな中で話を聞いた私たちはどうすればいいのかということを考えてほしいと思います。

養秀会館展示室の説明

それでは、展示の説明を少しします。ガラスケースに入っているのは、当時の一中生徒が使っていた制服とか下駄などです。こちらの木箱に入っているのは、写真と遺書です。ほかの学校ではありませんが、一中の３年から５年生は鉄血勤皇隊として動員されて１週間後くらいに遺書を書かされています。そのような点では、学徒隊の資料の中では貴重だと思います。ほとんどボロボロになっています。遺書の一部はこちらのガラスケースにもあります。このファイルは証言とか、新聞記事とかです。こちらは亡くなった一人一人について詳しく記載しています。向こうは、新聞記事や部隊がどのように動いたかということを地図上で示しています。向こうの壁側の写真は、戦前の一中の学校の様子です。学校の写真とか、登下校の様子とか、部活の様子などです。

それでは自由見学の時間にします。質問などがあればどうぞ。

質問

宮平さんがなかなか話せなかった家族ことを大田さんに聞いてほしいということでしたが、その理由は何だったのでしょう？　また、その時の宮平さんのご様子などで大田さんがお感じなったことがありますか？

宮平さんは、いつもにこにこしている方で感情をあまり表情に出さない方です。その時はここでお話を聞いたんですが、淡々と話されたというのが私の印象です。何故私だったのか、何故その時になって話したくなったのかという理由も判りません。

ただ、その依頼がある１か月くらい前だったと思いますが、一中２年の通信隊同級生で当時の足跡をもう一度確かめようと、嘉数高台から南部までのフィールドワークに行きました。その日の最後に「魂魄の塔」に行って、宮平さんが「僕の家族はここにいるかもしれない」とポロっと言いました。ここには家族の方と来られるのですかとお聞きしたら、戦争で無くなった家族のことを今の家族に話すことはないけど、慰霊の日などに孫と来たりするとは言っておられました。その１か月後にそのような話がありましたので、それがきっかけになったかもしれないということは考えられます。

宮平さんはいつも淡々と話されますが、お父さんが沖縄戦に参加したというアメリカ人ジャーナリストが取材に来られた時に感情をあらわにされたことがありました。「南部撤退後、あんなに狭い地域で、住民も沢山いる中、無差別に攻撃しなくてもいいじゃないか。あの時点ですでに日本とアメリカの差は歴然としていた。あの攻撃は許せない。一般住民を巻き込まなくてもいいじゃないか」と、あの攻撃で自分の家族を失ったということがあるのでしょうが、宮平さんが怒っているのを初めてみたことがあります。

（注）養秀会館

かつての沖縄県立第 1 中学校、及び現在の首里高校の同窓会である「一般社団法人養秀同窓会」が設置管理する同窓会館。会館内に、一中学徒隊資料展示室がある。